

氏名(本籍)	真 鋼 祐 子 (福岡県)
学位の種類	博 士 (社会学)
学位記番号	博 甲 第 1,455 号
学位授与年月日	平成 8 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	社会科学 研究科
学位論文題目	韓国の民衆運動における「恨」の力学 －「烈士」生成の死生観をめぐって－
主 査	筑波大学教授 博士(社会学) 副 田 義 也
副 査	筑波大学教授 菱 山 謙 二
副 査	筑波大学助教授 濱 日 出 夫

論 文 の 要 旨

本論文の目的は、韓国における社会変革の現代史を社会劇的な過程にとらえ、その源泉に集団存続のための犠牲死を喚起する宗教的形式をそなえた「ルートパラダイム」を見出すことにある。本論文は特に運動のさなかで非業の死を遂げた死者たちが「烈士」として祀られ、またその「根を解く」ことに傾注された生者たちのエネルギーが、運動をつきうごかしてきた状況に注目するもので、序章、第一部、第二部、終章よりなっている。本論にあたる第一部と第二部は、それぞれ二章ずつから構成されている。

序章は理論的検討にあたる部分である。まず微視的な視点として、韓国では逸脱的な死とされる「非業の死」、なかでも「自殺」をめぐる価値意識の問題が検討された。まず儒教の伝統的な規範である「孝」倫理に対抗する「義」の介在と、そうした意味のはたらきかけが、直接的な死の場面において生者たちとの間に成立した「シンボリック相互作用」をつうじおこなわれる、との微視的な観点が提示される。次にそうした自己犠牲へと人びとを駆り立ててゆく「義」をターナーのいう「ルートパラダイム」と読み替えるならば、韓国の民衆運動における運動過程は、「社会劇」という動態的かつ巨視的な社会過程としても把握されうることが指摘される。本論文のもちいる概念の枠組みとしては「自殺と他殺」「民衆と知識人」「冤魂と烈士」「怨と恨－恨解き」の四項目が取り上げられ、それぞれ、①シンボリック相互作用の観点をつうじたデュルケムの自殺論の批判的検討、②民衆の意識化過程を論ずるさいの、リップのカリスマ論（三極的思考型）の援用、③運動過程における死の両義性、④ニーチェ、シェーラー、ヴェーバーにおける「ルサンチマン」の命題にそくした「恨」の概念規定、などについて明らかにされている。

伝統社会の「孝」倫理とそれに対抗する「義」の拮抗関係に関心を寄せる本論文は、国家という政治社会にたいして取り上げられるべき多様な社会集団のうちでも、とりわけ家族のレベル（＝親子関係）を主軸とする。すなわち第一部では子である「烈士」（またはその予備軍）を、第二部では遺族である親たちを考察の対象とし、この両者が韓国という同族社会のワンセットとして措定された。

第一部の第一章では、マスコミ理論における「神話的語り」の視点から、1970年にはじめて抗議のための焼身自殺という手段をとった労働者・全泰壹が殉教者として認知され神話化されていった結果、民衆運動の流れのなかに「烈士」が誕生してくる経緯、および「烈士」モデルの形成過程が考察された。全泰壹自身が「死後の自己」として描いた全泰壹像に加え、そこにはさらに彼と生活をともにし臨終にも立ち会った母親や仲間たちの間で醸成された「死者の神話化作用」、および第三者である知識人によって描かれた民族民主主義の「理念化」といっ

た意味での、神話的内容を示していた点が実証される。続く第二章では、1980年の光州事件をつうじ「民族」「祖国」が再発見されるとともに、反米意識にもとづく民族民主主義のイデオロギーが確立され、さらにはフィリピンの二月革命をめぐる神話的語りを経たことで「烈士」生成のいくつかのルートパラダイムが引き出されてくる過程が記述される。そこではまず「東西冷戦構造」という国際的な大枠と、そういった歴史過程のなかで「冤魂思想」「恨－恨解き」「善悪二元論」「孝」「作聖」などの、極論すれば伝統的な「巫俗」「儒教」のエトスが多様な理念化の変転を遂げながら作用してきた点が指摘される。とりわけ「孝」にかんしては、そこに「家族的／社会的」という二つの次元を指定する「孝の二義論」が理念化されたことで、1986年以降「孝－不孝」のパラドックスが見出されるようになった点が特筆される。

第二部の第一章では、全泰壹の母親のライフヒストリーに語られた闘争過程をつうじ、遺された親たちにおける「不孝」および「アカ」をめぐる価値逆転のモデルが抽出されるが、それは悲哀の心理過程に始まり、弔い合戦としての儀礼過程を経て、子の「遺志の社会化」を目指す運動家としてのアイデンティティ再構築といった新たな社会過程に結びつくことが指摘される。第二章では、実際に遺志の社会化へと向けて活動を展開する遺族会の親たちの事例が考察の対象となる。悲哀の心理過程は「転位の中の悲哀の仕事」「投影同一視による悲哀の仕事」を媒介とすることで、「怨」から「恨」へとたどられ、儀礼過程をつうじてさらに「静態的恨解き」から「動態的恨解き」として、社会的にその死の意味を表出するようになる。そこで彼らは「構造／反構造」「伝統／反伝統」「儒教／反儒教」といった自己スティグマ化への葛藤劇を演じるのであり、「重要な他者」によって、また拘置所などの「籠もりの場」をつうじ遂げられる我が子の死の積極的受容と価値意識の逆転は、新たな社会過程への移行を意味するものであることが述べられる。

終章は要約と展望とからなるが、結びにおいて「烈士」生成の死生観は「分断」状況にたいし「孝の生命論」が示した「恨解き」の反応であった、との仮説が提示される。

審 査 の 要 旨

本論文の特徴は、政治運動という動態的かつ巨視的なテーマを、死生観・宗教意識といった微視的な視点から捉えようとした点にあり、これは政治の宗教社会学ないしは宗教の政治社会学とも呼ぶうる画期的かつ独創的な試みと評価される。韓国の政治運動にかんするかぎり、社会運動をめぐる諸理論や、社会心理学、組織社会学といった観点からの学生運動研究の蓄積が多々あるにもかかわらず、自殺にまつわる伝統的な忌避感情のゆえか、そうした問題が真正面から論じられたものはほとんど見受けられない。また日本における数少ない先行研究も、社会変動に伴い運動の形態がどう変化してきたかを問う極めて巨視的、あるいは通史的な記述内容にとどまっており、運動を内面からつきまわすごかしつてゆく歴史意識にまで分け入ったものは皆無といえる。近年、日本の社会学界では、80年代末以来の東西冷戦構造の崩壊と相次ぐ民族紛争に刺激を受け、改めてマクロ社会学の理論を見直し新たな議論を切り開こうとする試みがなされている。この点においても本論文の企ては、その新たな理論的地平への可能性を証したものとして評価されるはずである。

それはひとえに「ルートパラダイム」「社会劇」という分析枠組みの選択、および取り扱いに成功したがゆえのことであろう。分析にもちいられた資料は新聞・雑誌のほか、『全泰壹全集』『オモニの道』『全泰壹評伝』をはじめとする出版物、または著者自身が現地に赴き足で集めた膨大なビラやパンフレットの類であり、さらには直接面談による遺族たちへのインタビューの記録である。本論文はそのほとんどがこうした第一次および第二次の資料よりなっており、収集と整理、分析にかんする著者の力量が、分析から現在に至るまでの、特に60年代から90年代初頭にかけてのダイナミックな社会劇の歴史的展開の描写において遺憾なく発揮され、よってこの作品は類い稀なる成功例となりえたのである。また、それは著者の卓越した韓国語の能力があってこそ、初めて可能になったことでもある。

むろん本論文は、大学院学生の博士学位請求論文として限られた時間の中で執筆された作品ゆえ、社会学の学術論文として最高の完成度に達しているとは、いうことができない。一点をあげるなら、労働運動に言及するかぎりにおいてはマルクスの階級論をめぐる理論的検討にまで分け入ることが望ましく、この点に関連して、労働省・全泰壹の意識化過程を「三極的思考型」によって分析するくだりで、やや理論的捕捉の不明瞭さが認められた。

しかしながら何よりも本論文の学問的貢献は、宗教社会学の分野にマクロ社会学への挑戦という新局面を切り開いた点であり、よって上に述べた問題点は本論文の成果を否定するものではない。著者にたいしては今後、日本との比較研究など、より多角的な次なる仕事への飛躍を期待したい。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。